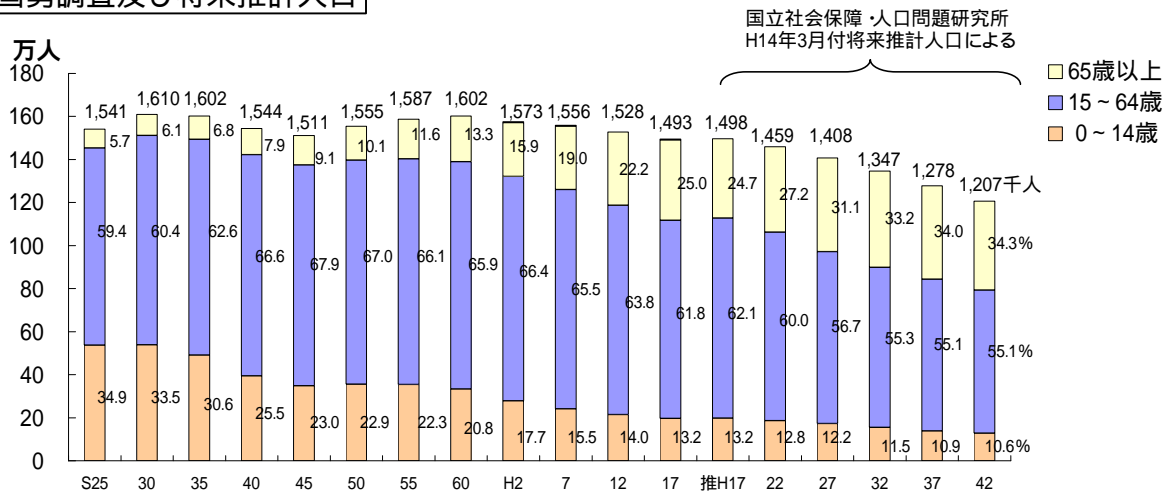


グラフでみる国勢調査

国勢調査及び将来推計人口



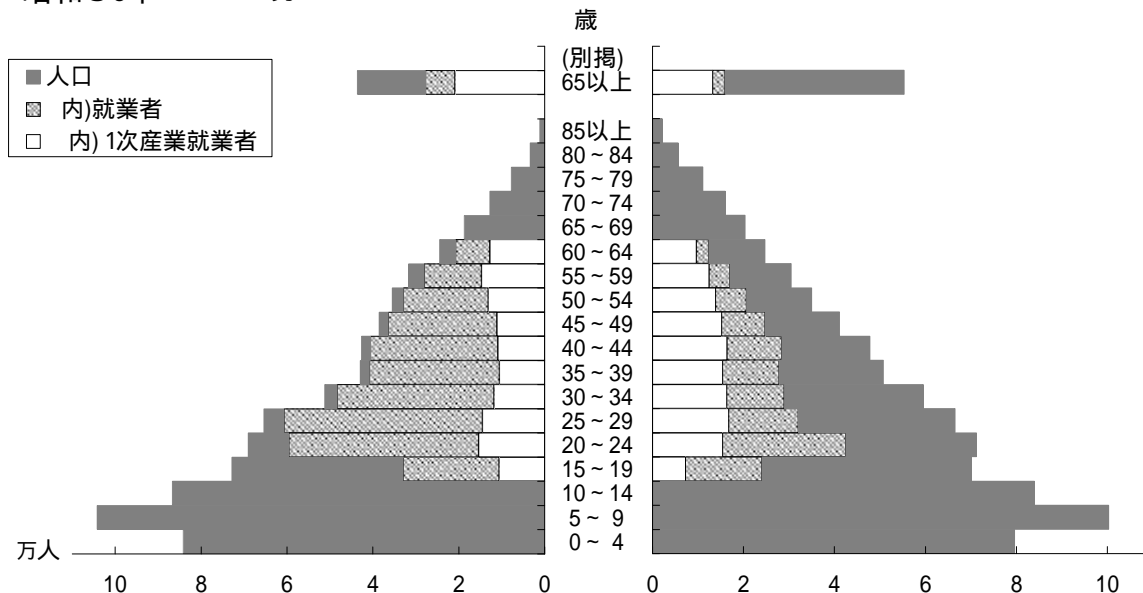
15～64歳の人口を生産年齢人口と言います。この生産年齢人口の割合は昭和45年を境に減少傾向にあります。全体をみると、高齢者割合が増加し、年少者割合が減少していますが、生産年齢人口の割合では緩やかな変化を維持しています。
この生産年齢人口は、今後もしばらくは減少傾向が続くと考えられていますが、平成32年以降はその割合は55%周辺で安定すると推計されています。ただし、その後も全体の人口は減少すると推計されています。

人口ピラミッド+

昭和30年

男

女



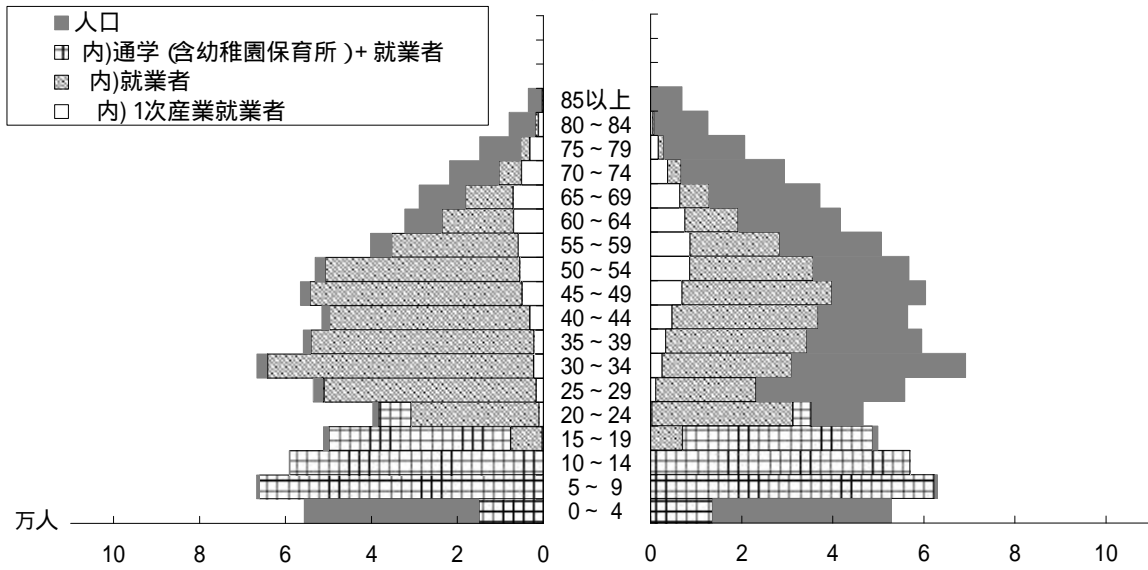
昭和30年のデータに通学者の年齢別はありません。また、就業者のデータは65歳以上についてそれ以上の5歳階級区分がありませんでしたので合計値で別掲しました。

昭和30年当時の人口ピラミッドは三角形に近い形をしています。この形は発展途上国等によく見られる形です。
当時の日本では、出生率も高く、戦後に医療事情が大幅に改善されたものの、結核が死因の上位にある等、まだまだ老年になる前に亡くなるケースが多かったと言えます。
また、就業構造に注目してみると、1次産業の比率がかなり高かったことが分かります。

昭和55年

男

女

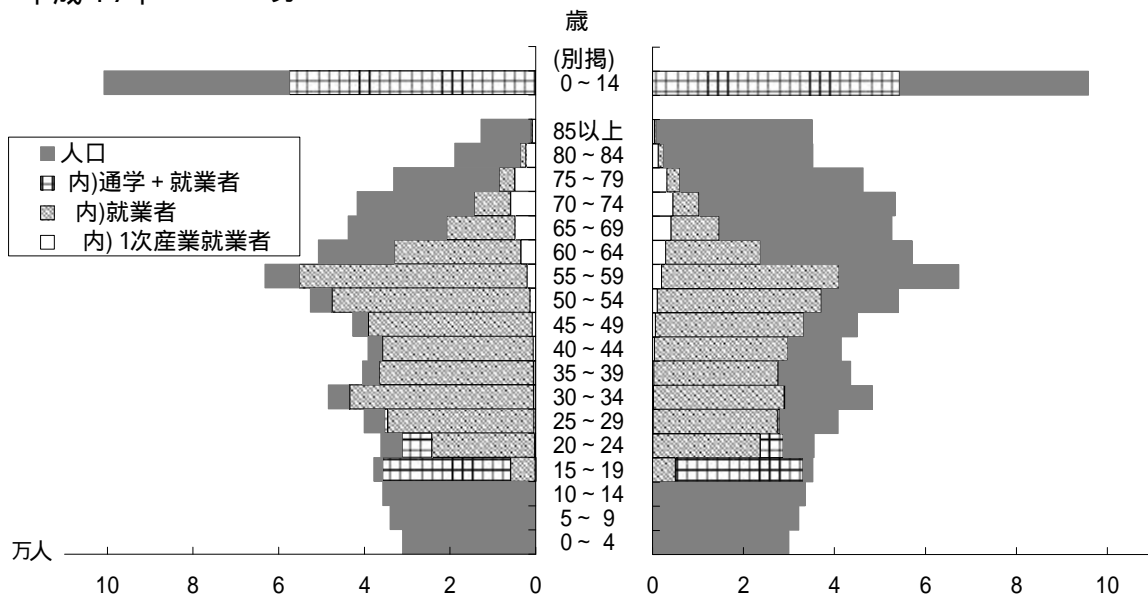


親の世代と同数の子供が生まれ、お年寄りになるまで死亡すること無く、その後、老衰によりその世代の人口が減少するという形をとるならば、人口ピラミッドは長方形の上に高齢者部分の三角形が乗った形になります。実際には、事故も病気もあるし、婚姻年齢が一律でないのでもうはなりません、昭和55年当時、この形に比較的近づいたことがわかります。
25年前と比べると、10代の就業者比率の低下、1次産業就業者の減少と高齢化が大きな特徴です。

平成17年

男

女



平成17年の15歳未満の通学者の詳細なデータはまだ、公表されていません。現時点で、統計局HP公表資料から、15歳未満の通学者の合計人数がわかりますので、合計値で別掲しました。

平成17年の人口ピラミッドは50代以下の世代で若い層ほど人口が少ない傾向にある形をしています。人口減少社会では逆ピラミッドと呼ばれる逆さまの三角形の形に近づいていきますが、現在はこの過渡期と考えられ、少子高齢化が顕著に現れ始めた形です。
25年前と比べると、少子高齢化が進んでおり、特に女性の平均寿命の延びと、社会参加が大きく現れています。また、25年前にもみられた1次産業就業者の減少と高齢化はますます顕著となりました。